

## 様々な音楽表現を取り入れた保育者の実践力向上についての一考察

### — テキストマイニングによる自由記述の分析から —

高橋民恵 平松なをみ 平松浩一郎 高 向山

こども健康学科

## A Study on Improving the Practical Skills of Those Involved in the Field of Infant Education by Incorporating Various Forms of Musical Expression - An Analysis of Free Expression Through Text Mining -

Tamie TAKAHASHI, Nawomi HIRAMATSU, Kouichirou HIRAMATSU  
and Xiangshan GAO

### 要 旨

乳幼児の前でピアノを弾きながら歌うことに不安を抱いている学生が約8割もいることを踏まえて、彼らにまず得意なものを見つけ、保育者としての自信に繋がるものを習得してほしいというねらいから、音楽を身体で表現するリトミック教育法の実践授業と、ピアノに頼らない歌唱指導として日本の伝承童謡である「わらべうた」を用いた実践授業を実施した。

実践授業を通して彼らの「不安」が、経験の無さと音楽を楽しむことへの恥ずかしさから来ているということが明らかとなり、「難しいと思っていた」ことが実践してみると思いのほか「簡単だった」と感じるなど、一つひとつの小さな事柄の積み重ねが成功体験となり、自信に繋がっていったことが伺える。また、ボールとわらべうたを用いた実践授業では、初めての経験に戸惑いながらも、それらを使った音楽表現を通じて子ども達と向き合えることに楽しさを感じられる新たな自分を発見したことも分かった。そして何より、「自分自身が楽しむこと」、「子どもと一緒に音楽を楽しむこと」が保育者にとって最も大切なことであると感じるようになったことが読み取れる。これはリトミック教育法の入り口に過ぎないが、その一端を体感したことは、「不安」に感じていた音楽を楽しんで良いのだという気持ちの芽生えであり、保育者としての自信に繋がる貴重な第一歩であると考えられる。

キーワード：リトミック わらべうた 音楽表現 テキストマイニング分析

### Abstract

In recognition of the fact that as many as around 80% of students feel anxious about singing in front of small children while playing the piano, practical lessons in the Eurythmics Teaching Method of using the body to express music and coaching sessions using traditional 'Warabeuta' Japanese children's songs for singing without relying on the piano were arranged with the aim of encouraging the students to first and foremost discover their strengths and thus help them to increase their confidence as childcare practitioners.

From the practical sessions, it became evident that this 'anxiety' stemmed from a lack of experience and a shyness about being able to enjoy music, but by putting into practice what the students had learnt, 'I thought it was difficult' became 'It was easy', and the accumulation of each small thing resulted in successful experiences, so it could be seen to improve self-confidence. Moreover, in the practice sessions where balls and 'Warabeuta' children's songs were used, it also became evident that although the students were rather perplexed when experiencing this for the first time, through the musical expression they used, they were able

to feel enjoyment in being in front of children and discover a new side to themselves. Above all, what can be drawn from this is that they began to be able to understand that to 'feel enjoyment themselves' and 'enjoy music along with the children' is, for childcare practitioners, the most important thing of all. Although this is merely a starting point for the Eurythmics Teaching Method, having experienced that will nurture a feeling that it is good to enjoy the music that was the source of 'anxiety', and this can be considered as a valuable first step towards gaining confidence as a childcare practitioner involved in infant education.

**Keywords** : Eurythmics (also known as the Dalcroze Method) Warabeuta traditional Japanese children's songs musical expression text mining analysis

## 1. 背景と目的

保育学生の意識変化についてのアンケート調査から「潜在的に2種類以上の表現を同時に行うことへの苦手意識を持っている学生が約半数いる（前田、2018）」ことがわかっている。また、彼らのピアノに対する苦手意識の原因を探るためのアンケート調査では「学生が抱える問題点として（1）譜読み（2）指使い（3）リズムの3点が抽出され、これらの問題を解決するための具体的な方法（福田・渡邊、2019）」が提示された。

本研究の対象者は、2018年の入学前にピアノのレッスンを受講したことがあると答えた学生が半数しかいなかった（平松、2019）。彼らは入学後、二年間のピアノ奏法の授業を受講したが、乳幼児の前でピアノを弾きながら歌うことに不安を抱えている学生が約8割もいることが、研究前の調査で明らかとなった。その不安は2種類以上の表現を同時に行うことへの自信のなさ、楽典に対する知識不足、弾き歌いの経験不足からくるものではないかと推測できる。そこで、ピアノに対する苦手意識の原因として抽出された上述の3点のうち、リズムに焦点を当て、苦手意識を克服し、保育現場で自信を持って音楽活動ができることを目標とした。そのために、まずスイスの作曲家・音楽教育者であるエミール・ジャック＝ダルクローズが考案したリトミック教育法を用い、基礎的な音楽表現の実践授業を実施する。また同時に、ピアノに頼らなくても、アカペラで歌唱指導のできる日本の伝承童謡である「わらべうた」を取り入れ、リトミックとの融合を図った、より実践的な授業を実施する。

本稿では、実践授業後の振り返りシートを基にテキストマイニング分析を用いて、学生が持つ音楽活動への興味と困難を明らかにし、保育者としての意識の芽生えのプロセスを分析する。それによって実践的で効果的な教育方法を探求する。

## 2. 研究方法

### 2.1. 対象

常葉大学浜松キャンパス研究倫理委員会の審査を経て、保育系3年生29名（内：男性1名 女性28名）を対象とした。

### 2.2. 調査期間

令和2年6月～7月にかけて実施した。

### 2.3. 調査方法

音楽系前期授業にて、リトミック教育の基本的な「リズム運動」「ソルフェージュ」及び、「わらべうた」を取り入れた5項目の授業を実施した。毎授業後に実施している授業内容に対する「振り返りシート」において、自由記述形式にて回答を得た。それを基に、テキストマイ

ニング分析を用いて分析した。

### 2.4 分析対象のテキストデータ

2020年6月から7月にかけて実施された音楽系授業29名の受講生から得た回答で、のべ100件を対象とした。本研究では自由記述における《難しいと感じたこと》《興味を持ったこと》および《保育者として必要だと思ったこと》の記述内容を対象とした。

### 2.5 テキストマイニングの方法

本研究で用いる計量テキスト分析ソフト KHcorder は文章を単語や文節などで区切ったりまとめたりするものである（阿部ほか、2020）。これは文章を単語・文節レベルで分析する統計手法であり、規則性のある情報を取り出すことができる（樋口、2014）。得られた「出現の頻度」や「共出現」「出現傾向」などを解析することで記述パターンやルールなどの解明を目指す（阿部ほか、2020）。

#### 2.5.1 形態素解析

本研究で使用した KHcorder では、分析データが名詞、サ変名詞、形容動詞、固有名詞、動詞、形容詞、副詞等に分解される（阿部ほか、2020）。以下は KHcorder を用いた形態素解析事例であり、文中の“/”は形態素ごとの区切り記号である。

<形態素解析事例>

ピアノ/の/弾き/方/で/、全然/違う/感情/が/伝え/られる/。

さらに、上記例の弾き/方といった複合語として使用されていると考えられる形態素は、新たに複合語として定義しなおすことにより、単語ごとの形態素には分解されず、“弾き方”として取り出すこともできる。

#### 2.5.2 抽出した特徴語の関連性の分析

形態素解析が完了したテキストデータについて、阿部ほか（2020）を参考にして抽出語の出現頻度を確認しながら、抽出語間の関連性を分析する。その分析過程では分析者の主観的要素が入るため、できる限り各種の客観的な関連性分析手法が必要となる。本研究は KHcorder を用いて探索する手法として、単純集計、共起ネットワークと対応分析を採用した。

## 3. 結果

### 3.1 抽出した頻出語について

形態素解析を行い、《難しいと感じたこと》、《興味を持ったこと》および《保育者として必要だと思ったこと》それぞれの抽出語の出現回数を主要な品詞別に表1、表2と表3に示した。

表1：《難しいと感じたこと》における抽出語の出現回数の上位表

順位	名詞	難しいと感じたこと								
		サ変名詞	動詞	形容詞	名詞C					
1	子ども	11	表現	5	合わせる	8	難しい	25	音	15
2	音楽	7			考える	6				
3	リズム	6			感じる	5				
4	ピアノ	5			聴く	5				
5	ボール	5								
6	音階	5								
7	自分	5								
8	拍子	5								

表2：《興味を持ったこと》における抽出語の出現回数の上位表

順位	名詞	興味を持ったこと										
		サ変名詞	固有名詞	動詞	形容詞	名詞C						
1	子ども	20	表現	7	わらべ	7	使う	23	面白い	7	音	31
2	音楽	16					感じる	12	楽しい	6	曲	10
3	ピアノ	14					弾く	12	高い	6		
4	リズム	14					思う	8				
5	音階	12					楽しむ	7				
6	身体	11					教える	7				
7	ボール	10					持つ	7				
8	民謡	10					変わる	7				
9	興味	8					合わせる	6				
10	拍子	6										

表3：《保育者として必要だと思ったこと》における抽出語の出現回数の上位表

順位	名詞	保育者として必要だと思ったこと										
		サ変名詞	形容動詞	動詞	形容詞	名詞C						
1	子ども	50	保育	15	必要	21	楽しむ	8	楽しい	8	力	16
2	リズム	21	表現	7	大切	14	考える	8			音	12
3	音楽	13					知る	8				
4	音階	11										
5	自分	10										
6	気持ち	8										
7	自身	8										

《難しいと感じたこと》については、記述統計量として、抽出語総数は733語、出現回数の平均は2.6回、出現回数の標準偏差は3.3であった。表1は、出現回数の平均から約1σ程度以上の出現回数である5語以上の名詞、サ変名詞、形容詞等の頻出語を掲載した。

《興味を持ったこと》については、記述統計量として、抽出語総数は1,661語、出現回数の平均は2.8回、出現回数の標準偏差は4.0であった。表2は、出現回数の平均から約1σ程度以上の出現回数である6語以上の名詞、サ変名詞、形容詞等の頻出語を掲載した。

《保育者として必要だと思ったこと》については、記述統計量として、抽出語総数は1,538語、出現回数の平均は3.1回、出現回数の標準偏差は5.1であった。表3は、出現回数の平均から約1σ程度以上の出現回数である8語以上の名詞、サ変名詞、形容詞等の頻出語を掲載した。

### 3.2 《難しいと感じたこと》、《興味を持ったこと》および《保育者として必要だと思ったこと》における頻出語について

#### 3.2.1 《難しいと感じたこと》の自由記述における頻出語間の共起ネットワークについて

表1に示される自由記述における頻出語について、「文単位」かつ「描画数60」の設定により、共起ネットワーク分析を行った結果を図1に示した。ここでは、頻出語のうち「感じる」「考える」「合わせる」をキーワードとし、その関連性に基づいて3つのグループ分けを行った。それぞれのキーワードの特徴から各グループを①【即興演奏から感じ取る】、②【ダルクローズ・ソルフェージュ的聴取】、③【経験不足からくる恥ずかしさと苦手意識】と命名した。

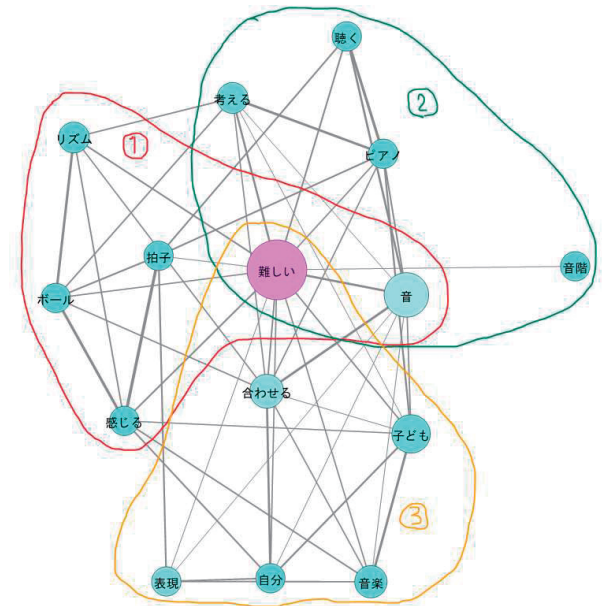


図1 《難しいと感じたこと》の自由記述における頻出語間の共起ネットワーク

【即興演奏から感じ取る】と命名した。

#### 3.2.2 《興味を持ったこと》の自由記述における頻出語間の共起ネットワークについて

表2に示される自由記述における頻出語について、「文単位」かつ「描画数60」の設定により、共起ネットワーク分析を行った結果を図2に示した。ここでは、頻出語のうち「合わせる」「弾く」「面白い」「楽しむ」をキーワードとし、その関連性に基づいて4つのグループ分けを行った。それぞれのキーワードの特徴から各グループを①【道具を使って人と合わせることの面白さ】、②【弾き方で変わるピアノの表現力】、③【わらべうたが持つ奥深さと面白さ】、④【絵本を使った指導による楽しさの発見】と命名した。

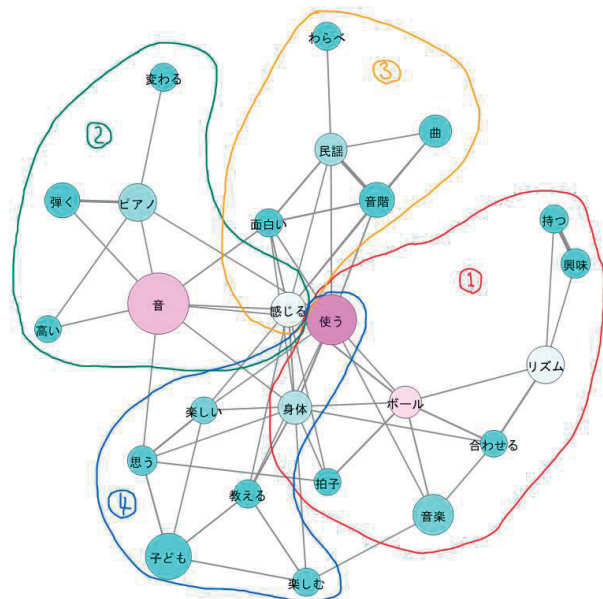


図2 《興味を持ったこと》の自由記述における頻出語間の共起ネットワーク

### 3.2.3 《保育者として必要だと思ったこと》の自由記述における頻出語間の共起ネットワークについて

表3に示される自由記述における頻出語について、「文単位」かつ「描画数60」の設定により、共起ネットワーク分析を行った結果を図3に示した。ここでは、ダルクローズが考案したリトミック教育が単なる音楽教育ではなく、幼児の心を育て、人間が持っている基礎能力を引き出して、人格形成の基になるものを培う役割を担っているという事が、深く関わってくる。つまりリトミック教育の真髄とは「心と身体の調和」を理念とする「人間教育」でもあるという事実である。このことを踏まえ、ここでは頻出語のうち「知る」「楽しむ」「考える」をキーワードとし、その関連性に基づいて3つのグループ分けを行った。それぞれのキーワードの特徴から各グループを①【保育者的視点の芽生え】、②【リトミックの真髄「楽しむ」】、③【子ども達を幸せにする「力」】と命名した。

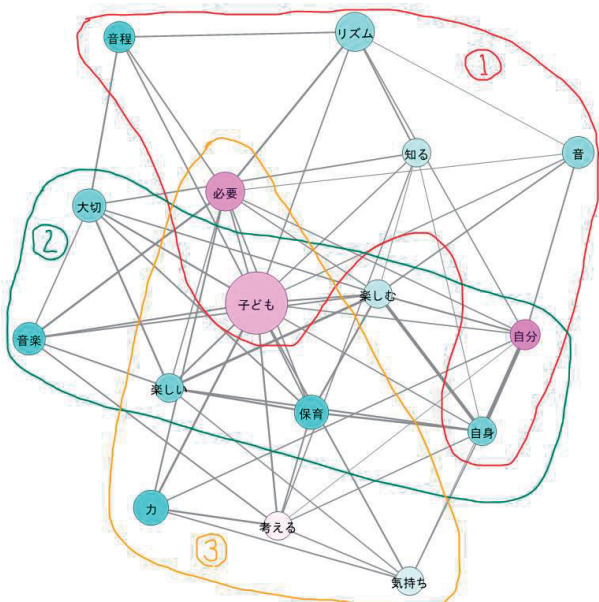


図3 《保育者として必要だと思ったこと》の自由記述における頻出語間の共起ネットワーク

## 4. 考察

### 4.1 《難しいと感じたこと》

#### ①【即興演奏から感じ取る】

リトミック教育法ではボールを使った実践を行うことが多い。なぜならば「ボールを使うことにより音楽を空間的にとらえ、そのエネルギーを感じ取ることができる」(酒井2008)からである。本研究の実践授業では、学生を1グループ5名に分け、筆者のピアノによる即興演奏に合わせてボールをついたり、グループ内で回したりさせた。ビート(拍)、ダイナミクス(強弱)、スペース(空間)を感じ取らせるためである。また、2, 3, 4拍子のそれぞれの拍子に合わせてボールを回すことで、拍子の違いも感じ取らせた。しかし、

学生にとっては初めての実践であり、即興演奏から「リズム」を「感じる」ことや、「ボール」でビートをとることは容易ではなかった。ましてや、即座に何「拍子」であるか「感じる」こと、「ボール」を使って「拍子」を表現することはかなり難しかったようである。

#### ②【ダルクローズ・ソルフェージュ的聴取】

本研究の授業内で学生に「聞く」と「聴く」の違いは何かを問いかけた。「聞く」は聞こえてくるもの、つまり受動的なものである。「聴く」は心で聴く、つまり能動的に聴くことであるとの返事が返ってきた。リトミック教育法における「ソルフェージュ」はリトミックの3本柱の一つであるのだが、この能動的に聴く聴取力を養うために、聴取した音を感じて身体表現を行う。その導入として本研究の授業では、任意の二つの「ピアノ」の「音」を聴かせ、どちらの音程の方が「高い」のか(低いのか)を当てるゲームを行った。しかし、意識的に音を聴く訓練をしてこなかった学生は「ピアノ」の「音」(特に音程の狭い二音)を「聴き」分けることは難しかった。また、今回の授業では音を感じて身体表現を行うダルクローズ・ソルフェージュを追求することができなかったため、図1の「聴く」と「考える」に関連性がなかったと考えられる。「聴く」ことから感じ取り、「考え」、表現することを今後の課題としたい。

#### ③【経験不足からくる恥ずかしさと苦手意識】

研究前に身体表現をすることについてどう思うかという調査をしたところ、恥ずかしいと答えた学生が半数以上いた。それは「自分」の感じた「音楽」を身体で「表現」するような経験をほとんどしてこなかったために、どのように表現したらよいかわからないという感情が「恥ずかしい」という言葉に表れたのだと解釈できる。

また、「子ども」・「音楽」・「自分」という頻出語が「合わせる」と繋がっていることから、「子ども」のテンポに「合わせ」てピアノを弾くことに難しさを感じていることがわかる。このことはすでに先行研究で示されているように2種類以上の表現を同時に行うことへの苦手意識の現れであると考えられる。

### 4.2 《興味を持ったこと》

#### ①【道具を使って人と合わせることの面白さ】

リトミック教育法の3本柱の一つである「リズム」は、音楽の根幹を成すものである。そもそもリズムの音価を読み取るだけであれば、楽譜に記された音符を見ればじゅうぶん可能である。しかし、リトミック教育法では、楽譜を読み取る前に、まず実際の演奏を聴き、リズムを体感し、それを身体で表現することにより1音1音に存在する譜面では表しきれない音のニュ

アンスを確認する。リトミックではしばしば「ボール」が使われるが、それはリズムを体感するための効果的な道具だと考えられるからであろう。事実、振り返りシートの中でも「ボール」が頻出語として登場している。ところが、頻出語の「ボール」は、難しいと感じたこと、興味を持ったことの両方で出現回数が多かった。つまり学生はボールを使用して音楽を表現するという経験がほとんどなかったため、それを難しいと感じつつも、“「ボール」を「使って」「リズム」を感じるという初めての体験がとても楽しかった”と答えたと考えられる。それだけでなく、“ビートや拍子を意識して「リズム」を楽しむことで、自然に「身体」を動かしたくなった。”、“「音楽」の「リズム」に合わせて「ボール」をついたり渡したりすることをみんなでき共有することに興味を持った”とも答えている。実践授業でもグループ内の友人と笑い合い、楽しみながらコミュニケーションをとっている姿が垣間見られ、リトミック教育法が音楽を教えるという側面だけでなく、人間形成にも役立っていることが再確認された。

## ②【弾き方で変わるピアノの表現力】

リトミックレッスンを受講した子ども達の多くは、「ピアノ演奏を聴きながら、音楽や音に内在するエネルギーを敏感に感じ取り、感じたままの動きを自然に表現する。ピアノ演奏を変化させることによって、その動きはさらに表現力を増す。」(鎌形、2003) ことが先行研究により明らかにされている。

本研究の実践授業でも、筆者が童謡をあえてニュアンスを変えた2通りのパターンで弾いたものを聴かせ比較させたところ、学生は「ピアノ」の伴奏が「変わる」だけで、音楽そのもののイメージや雰囲気が「変わる」との感想を持った。また、4.1《難しいと感じたこと》②【ダルクローズ・ソルフェージュ的聴取】でも述べた、任意の二つの「音」を聴かせるゲームにおいても、ふだん楽譜で視覚的にしか認識していなかった音の「高さ」を、聴覚だけを頼りに判断することがとても興味深かったとも答えている。以上のことから、ただ譜面通りにピアノを弾くのではなく、自分が奏でる「音」に耳を傾け、ピアノの弾き方を意識しながら演奏することで、その曲をダイナミックに表現したり、その曲のイメージまでも劇的に変えることができることを感じた読み取ることができる。

## ③【わらべうたが持つ奥深さと面白さ】

幼児期に好まれる音楽の特徴として「明るく」「リズムカル」であること、「繰り返される言葉やリズム」であること(内山・森野、2015)があげられる。この「繰り返される言葉やリズム」を用いたものに日本の伝承童謡である「わらべうた」がある。わらべうたは、日本語特有の語感(イントネーション)と、繰り返しが

が多くシンプルな旋律からできており、民謡音階を基に作られているものが多い。また、ピアノ伴奏に頼らなくてもアカペラで、動きを伴い楽しみながら歌うことができるため、ピアノを使った音楽活動に不安を抱えている学生にとっては、保育現場で使いやすい題材だと言える。そこで本研究の授業において、わらべうたに使われている民謡音階について分析をし、わらべうたの作曲を試みた。その結果、学生は、わらべうたの中には「ラ」と「ソ」の2音のみでできているものもあり、シンプルで容易な曲であることに気づいた。このことから、「わらべ」(うた)や「民謡」「音階」に興味を持ち、「面白く」「感じる」学生が多かったことが読み取れる。しかし、子どものためのわらべうたであるにも関わらず、図2の頻出語において「子ども」と「わらべ」の間には関連性がないことも読み取れる。これは、筆者の実践授業において民謡音階とわらべうたの関連性を強調しすぎてしまったためと考えられる。そしてもう一つ、幼少の頃からわらべうたが当たり前のように身近にあった時代と比較すると、近年、様々な音楽が溢れている環境で育った学生にとって、もはや、わらべうたは身近なものではなく、“学校で教わる音楽”になっていることも図2から読み取れるのではないだろうか。

## ④【絵本を使った指導による楽しさの発見】

リトミックの実践授業の導入例として絵本『だるまさんが』を使用した。この絵本に出てくるだるまさんの動きの模倣と、その動きに即興的に音楽をつける方法を紹介したのだ。簡単な動きに簡単な音を入れただけなのだが、学生は楽しみながら身体表現を行い、「身体」を「使う」ことは「楽しい」という想いを彼らの表情から感じ取ることもできた。また、様々なアイテムを使って様々な方法で音楽を「楽しむ」ことができることに興味を持ったようである。また、楽譜通りに弾かなくても即興でピアノを弾いて「子ども」達と「楽しむ」ことができる(振り返りシートから抜粋)という新たな発見もあったと考えられる。

## 4.3《保育者として必要だと思ったこと》

### ①【保育者の視点の芽生え】

「自分」・「自身」・「子ども」・「リズム」が「知る」に繋がっている。これは「自分自身を知ること」、「子どもについて知ること」、リズムすなわち「リトミックについて知ること」に置き換えられると解釈できる。前述したとおり、音楽の分野だけでなく、人間形成の基にもなるリトミックを使って、子どもと関わりたい。そのためにもっとリトミックについて知りたい。正しい「音程」で歌いたい。子どもの感情表現を引き出すピアノが弾きたいという意欲の芽生えであり、保育者として自分自身の技術向上が必要である

という気づきがあったと考えられる。

## ②【リトミック教育の真髄、「楽しむ」】

リトミックの指導者であるエリザベス・バンドゥレスパーは「リトミックを上手に教えるためには、楽しさや遊びへの研ぎ澄まされたセンスが必要である。楽しさがレッスンの中に必要であり、子どもみんなと一緒に楽しめることが大切である。」と述べている。これはリトミックの真髄を言い表している。

図3の②では、「子ども」・「自分」・「自身」・「保育」・「楽しい」が「楽しむ」に繋がっている。ここから「保育」者「自身」が「楽しむ」こと、「子ども」と一緒に「音楽」を「楽しむ」ことが大切だと感じていることが読み取れる。リトミックを体感したことで、不安に感じていた音楽を子ども達と一緒に楽しんで良いのだという気持ちが芽生えてきたと考えられる。

## ③【子ども達を幸せにする「力」】

「考える」は他の多くの頻出語と結びついている。筆者は、この授業を通して、保育をする上で、音楽の資質向上が目的ではなく、音楽をツールとした子どもの人格形成、さらには子どもの幸せに繋がることが究極の目的であると述べてきた。そのことが授業実践を通じて学生に伝わり、“子どもが「楽しい」「気持ち」になることを考える。”、“子どもに寄り添った「保育」を考える。”といった学生の決意ともとれる言葉に表れている。また、表3から「力」の出現回数の多いことがわかる。考える「力」、対応する「力」、聴く「力」、見極める「力」、教える「力」、子どもの気持ちを読み取る「力」（振り返りシートより抜粋）など様々な「力」が保育者にとって必要であると感じていることが読み取れる。②で述べた通り、学生は音楽を通して、楽しんで保育をしても良いのだという意識が芽生えた。そのために様々な「力」をつけたいという意欲がわいてきたと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

考察から、入学当初には子どもの前でピアノを弾きながら歌うことへの不安が先に立ち、自信を持ってないでいた学生達が、実践授業を通じて簡単なものでも良いから、保育現場で子ども達と楽しみながら音楽表現活動を行いたいという意識が芽生えはじめたことがわかる。しかし、一方で、そのためには学生達自身の技術力を向上させる必要があると認識していることも読み取ることができる。これは、リトミック教育法の真髄である「楽しさ」が学生に伝わり、リトミック教育が音楽にとどまらず、人間形成に役立つものであるという認識が学生の気持ちを動かしたのではないだろうか。

そして、日本の歴史と文化を内包している「わらべうた」を扱ったことについても、意義があったと考えられる。わらべうたは、かつては親から子ども、子どもから子どもへと伝承され、幼児期には当たり前のように身近にあったが、近年、歌う機会が減ってきたことは否めない。これは「時代の変化で、子供たちの遊びが一変したことが主因をなしているが、わらべ唄の中には、意味のわかりにくい古い言葉や、方言・訛語が多く、また物語形式の長い歌詞などもあって、新しい世代の子供たちがそのまま継承しにくい」（浅野建二『新講わらべ唄風土記』）からだと考えられる。さらに、「多くの子どもが都市生活を行っている。その都市は夜間照明、道路のアスファルト化、通学手段の変容、広場の縮小化、川や林の消失、季節感の喪失で、以前の子どもの環境を大きく変えてきている。そのため天体気象や動植物の歌が衰退する条件は整っていった」（岩井正浩『子どもの歌の文化史～二十世紀前半期の日本』）ことなど、さまざまな要因が複雑に絡み合っ、子ども達の中にわらべうた離れが進行していったのだと考えられる。近代化がわらべうたを葬り去ったと言っても過言ではない。だとすれば、なおさら日本の歴史と文化を伝承していく場として、保育の音楽活動に「わらべうた」を取り入れる事は大変意義深いことであり、必要不可欠な教育であろう。幸いにもわらべうたは歴史と文化の伝承だけでなく、「（わらべうたは）最も自然な歌いやすさを持ち、音楽上の諸要素が学べ、音とリズムを自由に駆使する能力が育つ」（柏瀬、1975）ものであるため、幼児期の音楽教育には最適な題材であると考えられる。今後も保育現場にわらべうた教育を広められるよう、さらに研究を進めていきたい。

考察を通して、学生達は大きく成長したことが伺えるが、これらはまだ意識の芽生えに過ぎず、本研究の結果からも明らかであるように、彼らはまだリトミック教育法の入り口に立ったに過ぎない。保育者が音楽を楽しむ姿を見て、子ども達が楽しみながら音楽を学べる環境を創り出すためには、子ども達を楽しませるだけの技術的、精神的余裕を保育者自身が身につけることが必要なのである。そのためにも、今後はさらなる実践の機会を設けて学生自身のスキルアップを目指し、未来の保育者としての自信に繋がる実践的で効果的な教育法を探求していきたい。

## 参考文献

1. 阿部眞弓・高 向山・海野展由 2020『保育実習での評価の傾向に関する研究—テキストマイニング分析による頻出語の可視化の試み—』常葉大学プロデュース学部雑誌第14巻第1号 P.63～69
2. 浅野建二著 1988『新講わらべ唄風土記』p.19 柳原書店
3. エリザベス・バンドゥレスパー著・石丸由理訳『ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社

4. 福田由紀子・渡邊洋子 2019『保育者養成課程における音楽実技（ピアノ）指導法』白鷗大学教育学部論集 P.54
5. 樋口耕一 2014『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版
6. 平松なをみ 2019『保育現場に於ける保育者のリトミック指導力向上の必要性Ⅱ』常葉大学健康プロデュース学部雑誌第13巻第1号 P.166
7. 星山麻木編著・板野和彦著 2015『一人一人を大切に  
するユニバーサルデザインの音楽表現』萌文書林
8. 岩井正浩著 1998『子どもの歌の文化史～二十世紀前半期の日本』P.307 第一書房
9. かがくいひろし作 2008『だるまさんが』ブロンズ新社
10. 鎌形由貴乃 2003『乳幼児の生活とリトミック』日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集「リトミック研究の現在」P.163 開成出版
11. 柏瀬愛子 1975『幼児の創造的表現力を育てる音楽教育』名古屋女子大学紀要 P.163
12. 片山忠次・名須川知子著 1998『生活保育の創造』法律文化社
13. 木村はるみ・蔵田友子 2001『わらべうたと子ども』古今社
14. 前田知子 2018『「音楽表現」に対する保育学生の意識変化について—リトミックが及ぼす一年生の影響を中心に—』下関短期大学紀要第36号 P.108
15. 小川清実 2001『子どもに伝えたい 伝承遊び』萌文書林
16. 酒井美千代 2008『ボールを使ったリトミック実践の意義と考察』—小学校音楽科での授業実践を通して—日本ダルクローズ音楽教育学会創立35周年記念論文集「リトミック実践の現在」P.45 開成出版
17. 内山尚美・森野かおり 2015『保育者・教員養成校におけるリトミックの活用性についての試案』東海学院大学短期大学部紀要 P.97